

2020年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

初風の島へ二丁艫すべりだす
香ぐはしき土より剥がし取る若菜
福を呼ぶおかめひょっとこ春隣
運針は苦手なれども針祀る
思ひ切り泣き春愁を振り払ふ

八王子 石井 蓉子

工賃と賞与をもらうクリスマス
一人居のゆず湯がくれしリラックス
ワンルームとて手抜きなく年用意
焼蕎麦屋に呼びかけられているのかも
予約日を違へず通院年暮るる

町田 小森 まさひこ

猿曳の猿深々と頭下げ
武蔵総社の裏なる森の淑気かな
総社へと続く冬木の並木かな
虚子句碑の冬木を過ぎし日を浴びし
門松の竹平らにありし府中かな

松尾芭蕉

一露も こぼさぬ菊の 氷かな
百歳の 気色を庭の 落葉哉
二人見し 雪は今年も 降けるか
冬庭や 月もいとなる むしの吟
冬牡丹 千鳥よ雪の ほととぎす

2020年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子

摘みすぎし土筆に指をてこずらず
決断をして春愁をぬぎすてる
涅槃西風礎石を残す大伽藍
甘き香を重く溶かしてリラの雨
川風に花の満ちくる音を聞く

八王子 石井 蓉子

待春の色そここに通所道
友となるテレビを消して春の宵
決められし期日通院春の道
一つ先の駅まで行って春を知る
よちよちと前行く子供草萌ゆる

町田 小森 まさひこ

免状無き卒業果し部屋を出る
施設でふ卒業式のあたたかく
人口減の止まるニュースや四月馬鹿
春の日の影に寄り添う姿あり
連翹の色が地球を明るうす
連翹(れんぎょう)

与謝蕪村

春の海ひねもすのたりのたりかな
春の夜や宵あけぼのの其中に
春雨の中を流るる大河かな
古庭に鶯啼きぬ日もすがら
春をしむ人や榎にかくれけり

2020年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
葉の色に命を透かせ繭を編む
仄白き闇に繭編む音幽か
新緑にしたたる新たなる元氣
夏服や残る若さを惜しみなく
山梔子の花に氣怠き雨の午後

八王子 石井 蓉子
春の香と洗濯物を取り込める
梅香る角を曲がれば一人かな
春を啼く鳥に声掛け出かけたる
草木の名確かめてゆく春の道
ベランダに春大空の開けたる

町田 小森 まさひこ
中止渦の自肅禍となり花は葉に
列島の春を映すを見し家居
待つ人のありて春愁持ちて行く
大口を開けて泳げよ鯉幟
燕来て木々萌え深む大地なり

2020年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
さくらんぼつまむ幸せさうな指
冷麦の微妙な細さ太さかな
梅雨深し好みの香を焚き込めて
泡ひとつ浮かぶ水面や今朝の秋
しだれゆく花火を音が追ひかける

八王子 石井 蓉子
さえずりや鳥は自由を持ってをり
鳥は鳴き日はさんさんと夏に入る
膨らめるつぼみ大きく夏来る
青空や巣を出たらしき燕かな
風鈴の短冊揺らす夏の風

町田 小森 まさひこ
万緑や真中に太古からの湖
老鶯の木の葉揺れの無き屋の山
蓴舟の傾きばかり気になりぬ
(ぬなわ舟:山形のジュンサイ池で見た風景)
国道に木を傾けて青葡萄
お隣のトマト大きく鈴なりに

2020年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
闇うならせて颱風の近づき来
颱風の闇へとちぎれ飛ぶ大樹
昨夜荒れし闇に今宵の虫時雨
風害に耐へきれざりし新松子
来し方は語らずに秋惜むかな

八王子 石井 蓉子
夕暮れの蝉の忙しく鳴きにけり
百日紅咲く道に満つ暑さかな
暑き朝今日は広島ですと来るメール
蝉鳴いてひまわり咲いて夏盛り
入道雲の優しき顔に育ちゆく

町田 小森 まさひこ
アルプスの水にまかせて芋水車
アルプスの風に色増す林檎かな
活気やや戻り街の初紅葉
活けられてリースにされていつるもどき
れもん生りその木の素性知りにけり

2020年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
星をいただき初霜を踏む朝
切妻の主家の障子明りかな
カステラに洪茶を添へて漱石忌
自愛とて肩凝るほどに著ぶくれて
すぐ味見したがる夫と年用意

八王子 石井 蓉子
ハロウインの可愛いお化けが街をゆく
鐘なってさらに夕暮れ早き秋
秋晴れや行ってらっしゃいと声をかけ
彼岸花咲いて綺麗な秋になる
ランドセルところこあゆむ秋の朝

町田 小森 まさひこ
形相を陰しく狛の神無月
山茶花の蕊の残りし箸の目
冬耕の広き大地に土埃
懸大根にむしろかぶせて山暮らし
冬ぬくし富士の麓になにもなく

与謝蕪村
易水にねぶか流るる寒さかな
葱買うて枯木の中を帰りけり
宿かせと刀投げ出す吹雪かな
斧入れて香におどろくや冬木立
水鳥や枯木の中に駕二挺